

恋煩いの懺悔



DRAGONQUEST XI
UNOFFICIAL FANBOOK
CAMUS * VERONICA

恋煩いの懺悔

黒靴

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14515475>

カミュベロ, 再録

過去のカミュの想いを知ってしまったベロニカとカミュの恋煩いの話です。

2020.10.25 DQwebオンラインイベント【見学会】にてネットプリントで頒布した小説のweb再録です。

Table of Contents

- [恋煩いの懺悔](#)

恋煩いの懺悔

夢を見ているのかと思った。

夏が終わり、本格的に秋を迎えた真夜中の廊下は少し冷える。羽織った子供用のカーディガンはプチャラオ村の市で間に合わせに買ってもらったもので、あまり好みの柄ではないが暖かい。

厚意で泊めてもらえるのをいいことに、近頃は拠点のようになっているメダル女学園の学生寮である。夜中に目を覚ましたベロニカは、寝付けずに少しだけ校庭を散歩していた。

植え込みに並んだスズランの花が月光に照らされる様は、どこか幻想的だ。ぼんやりと眺め、小さく溜め息をつく。こんなに綺麗な風景を見ても、乙女の気持ちはなかなか晴れることはない。

ベロニカの胸中を占めるのはもちろん、世界を脅威にさらす邪神のことだ。勇者を導く使命は、彼女の人生の意味ですらある。勇者を守り、かの邪悪な神を討つことでベロニカの頭はいっぱいだ。しかしほんのひとしずくだけ、賢者としてではなく恋する少女の苦悩が紛れ込んでいる。

自身の恋心に気付いたのは、もうしばらく前のことだ。ベロニカは夜空に浮かぶ青い月に、想い人ーカミュの瞳を想う。

何かにつけてベロニカをからかい、不必要な嫌味を放り投げてくる男。はじめはなんて胡散臭くイヤなヤツなんだろう、と腹を立てていたものの、共に過ごすうちに彼の本質が見えてきた。前科持ちの元盗賊という肩書きや粗野な言動に似合わず、実は驚くほど生真面目で優しい。やたらとからかうくせに、ベロニカのことをよく見ていて、小さい身体に四苦八苦しているのを助けてくれる。

なにより、イレブンやセーニャには兄貴風を吹かせている彼が、ベロニカにだけは年相応どころかまるで少年のような顔を見せるのに、胸を高鳴らせないのは難しかった。

別に、彼とどうこうなりたいわけではない。使命と関係のない浮わついた恋心なんて、不必要なことはわかっている。それでも、打てば響く会話も、ちょっとした特別扱いも嬉しかった。朝起きて、彼が声をかけてくれれば一日がんばれる気がした。

それが、近頃急に変わってしまったのだ。勇者と共に歩む旅も佳境に入り、あとは空に浮かぶ黒い星へ挑むのみである。中で世界を闇に包む力を蓄えている邪神を確実に葬るため、ベロニカたちは技を磨き武具を整えていた。

ちょうどベロニカとセーニャが導きの木として新たな道を拓いた頃からだったか。あんなに近いと思っていたカミュとの距離が急に開いてしまったのだ。態度がそっけないどころか、避けられている気さえする。負けじと普段と同じように話しかけても生返事な上、外されたまま合わない視線にベロニカはひどく落ち込んだ。

それでも、そんなことで気を落としている場合ではない。個人的な感傷を彼女の本分である使命に響かせてはならないのだ。しかしこうしてひとり物思いにふける時間ができてしまえば、つい彼のことを考えてしまう。

なぜ？ どうして？ 答えてくれる相手のいない問いは、行き場を失ってまた胸に戻る。

気持ち晴れることはなかったが、あまり夜風に当たりすぎると小さな身体はすぐに不調をきたす。夜の一人散歩を切り上げ、割り当てられた部屋に戻ろうと校舎に足を踏み入れたところだった。

そもそも夜の学校というだけで、少し怖い。ここで本物の幽霊に会ったことがあるだなんて話も聞いたことがあるし、ベロニカは実はその手の話にはあまり強くないのだ。

だから明かりがほぼ消された暗い校舎の奥の方で、炎やランプと異なる色の光が見えたとき、ベロニカは心臓が飛び出ないように両手で口を押さえた。木漏れ日のような薄緑色の光は、廊下を薄く照らしているが光源は見えない。あのあたりは、たしか校長室だっただろうか。

ひょっとしたらあの少し変わった校長が、夜な夜なひとりでメダルを磨いているのかもしれない。けれど、光の不思議な温かさに吸い寄せられるように、ベロニカの足は光の発生源に向かっていった。

足音を抑え物陰に隠れながら謎の明かりの方へ向かったのは、決して恐怖心からではない。学園の生徒ではないとはいえ、夜中に校舎を歩き回るのはあまりよくないことだと自覚があつてのことだ。

こういうときに小さな身体は役に立つ。校長室の影に身を隠しながらそっと覗くと、ぼんやりと光を放つそこにいたのは、よく見知った勇者とその相棒だった。

赤々と燃える焚き火が、並んで丸太に腰掛けるふたりの顔を照らしている。手にしている錫のマグは、キャンプで愛用しているものだ。

なんだ、ふたりとも起きてたのね。

声をかけようとしたところで、慌ててしゃがみ込んで身を隠す。

カミュの口から、自分の名前が出たためだ。

「ベロニカのヤツもよく、こうして眠れない～つって夜中に起きてくるんだよな」

「本当？　僕が見張りのときは一度もなかったな」

「おいおい、マジかよ。アイツめ、秘蔵のブランデー入りホットミルクに味を占めてやがったのか」

「あはは、そんなの作ってあげてたんだ。僕にはないの？」

「ちゃんと葡萄酒出してきてやってるだろ。お前もホットミルクがいいなら故郷の母ちゃんにでも作ってもらえ。……もう、近いうちに乗り込むんだろ？」

こくり、とイレブンが首肯する。年の近い男同士の飾らない会話が途切れ、流れる沈黙の後ろで梟の鳴き声が微かに聞こえた。

「やっとだ。やっと、奴の首に剣が届く」

「……そうだな」

ベロニカは眉をひそめた。奴、という言い回しに引っ掛かりを覚える。それ以上に、静かなようで激しい感情を湛えたイレブンの目に、彼が彼でないような気味の悪さがあった。

ベロニカはもう一つ、決定的な違和感に気付いた。

ここは校舎の中で、焚き火などできるわけがない。ましてや清廉な女学園の中に丸太などあるわけもなく、仰いだ天井のあたりに濃紺の夜空が広がり星が瞬いているのを見て、ベロニカはますます混乱した。立ったまま夢をみているのだろうか。

手の甲で目を擦ったベロニカは、首を振った。摩訶不思議な現象には覚えがある。我らが勇者様がその力で起こす、奇跡のことだ。

そういえばここにある大樹の根のようなものは記憶の器と呼ばれ

ているらしい。これまでも、過去の様子がまるで映像のように頭に流れ込んでくるような体験をしたことがあった。少々勝手が違うが、ベロニカが今見ているこのイレブンとカミュも、本人ではなくいつかのキャンプでのふたりなのだろうか。

ベロニカが思考を巡らせている間にも、ふたりはマグの中身をちびちびと啜りながら、夜中らしく抑えた声で話している。

「僕にとっては、あまりにも多くの仇だ」

「産みの親もそうだしな、仇っていうのも無理はねえよ」

抑えきれない激情を瞳の奥で燃やすイレブンに比べて、カミュの表情は幾分穏やかだった。

「……オレは元からマヤ以外何も大事なものを持ってねえから、個人的な恨みっていうよりはお前の助けになりたいってただけだ」

イレブンが先を促すように隣を見る。

「アイツの……ベロニカの守った世界を、あんなヤツの好きにさせてたまるか、とは、思ってるぜ」

はにかんだカミュに、イレブンは毒気を抜かれたような顔をした。何度か瞬きをしたあと、相棒と同じように笑った顔はもういつものイレブンだ。

「ありがとう、カミュ」

「ん？」

「忘れるところだった。僕が戦うのは、自分の憎しみや恨みを晴らすためじゃなくて、誰かを守るためなんだ。思い出させてくれて、ありがとう」

「別に、そんなつもりで言ったわけじゃねえよ」

少々ぶっきらぼうな口調は照れ隠しだろう。それでもまるで弟を見るようなやさしい眼差しと口元の笑みは変わらない。

それにしても、とカミュを見るイレブンの目が、少し遠くを見るように変わる。

「カミュは、本当にベロニカが好きだったんだね」

ベロニカは、自分の喉が息を飲むのを聞いた。

「そうだな」

きっと、何を言っているんだ、と訝し気な顔をするか、あり得な

い、と笑い飛ばすだろうと思っていた。たとえ本心がどうであれ、それがいつも通りのカミュだ。だから、なんのためらいもなく肯定するその声をベロニカが飲み込むのには、いささか時間がかかった。

心臓が早鐘を打ち始めたベロニカを置いて、カミュは淡々と語る。

「長いこと気付かなかったが、オレはアイツに惚れてたみたいだ」
どくどくと脈打つ心臓がうるさい。頬が熱い。

カミュは、ここでベロニカが聞いているなんて露ほども思っていないだろう。とはいえ、あまりに冷静な告白に、一人で顔を赤らめひどく動揺している自分が馬鹿みたいに感じる。

黙って聞いていたイレブンが、茶化す様子もなく頷いた。

「うん。……カミュは今も、ベロニカのことばかり話してるしね」

「はは、違いねえ。いなくなって初めて気付くなんて……オレはいつも遅すぎるのさ。今、どんなに会いたくてもベロニカはもういない。死んだんだ」

その声は、先程の告白よりもずっと早く脳に染み込んできた。

理解するのに時間など、要しない。

もういない。死んだんだ。

誰が？ ベロニカが。

どんなに口が悪くても、彼がそんな悪趣味な冗談を言わないことは知っている。じゃあ、何？ 死んだって、あたしが？

確かにここに自分がいるのに、生きているのに、なぜかでたらめには思えない。

目の奥がチカチカと瞬き、痛む。

激しく脈打っていたはずの心臓の音が聞こえない。息が震え、足がふらつき、力の抜けた膝が床につく。

その音に振り返ったのは、カミュと話していたイレブンではなかった。

「ベロニカ？」

声は、予想外に近くからした。

星空の下で丸太に腰掛け語らうイレブンとカミュは蜃気楼のよう

にゆらめき、掻き消える。あとには、木に巻き付いて鈍く緑色に光る大樹の根が残った。浮き出た不思議な紋様が、勇者の紋章に呼応するように明滅している。

ベロニカが身を隠していた校長室の壁の死角から、目を見開いたイレブンがもう一人、こちらを見ていた。

「見ちゃった……？」

みるみる蒼白になる勇者の顔面に、ベロニカは頷くことしかできなかった。



「ギラグレイド！」

灼熱の閃光が奔り、羽の生えた悪魔のような姿の魔物たちを空中で燃やし尽くす。短い断末魔が消えるとベロニカは掲げていた杖を降ろした。

襲い掛かってきた魔物の集団を捌ききった仲間たちはそれぞれの得物の血糊を拭い、セーニャやロウが癒しの術を唱え、一行はまた探索の続きに戻る。

いにしえの勇者の仲間・戦士ネルセンの課す試練は、昨夜の勇者の奇跡に負けず劣らず不可思議である。建物の中にいたかと思えば、急に寒風吹き荒ぶ雪原に出たり、煮えたぎる溶岩の流れる火山地帯に放り出されたりする。

イレブンたち一行は今日も早朝から、邪神討伐のための力と技を研鑽すべく、試練の里からダンジョンへと潜っていた。

寝不足の頭は鈍く痛むものの、ベロニカ得意の攻撃呪文はすこぶる調子が良い。理由はなんとなく思い当たるが、認めたくないし認めるべきではない。

うっかり目が追っていたことに気付いてしまい、思わず誤魔化すように彼の背中を睨みつけ、両足で大地を踏みしめ歩く。

イレブンとの話は、朝日が昇っても終わらなかった。

にわかには信じがたい、勇者だけに許された時を渡る方法。

より多くの命を救うため、彼は一度得た平和を棄て、時を巻き戻したのだという。

その放棄された平和は、ベロニカの尊い犠牲と引き換えに辛くも勝ち取ったものだったのだと、イレブンは彼女に詫びた。

「今の君に謝るのも変だってわかってるんだけどね」

「たとえあたしが化けて出て怒ったって、アンタは選択を変えたりしないってわかってるわ。謝るのはお門違いよ」

変なところで頑固なんだから、と口を尖らせるベロニカを見て、イレブンはなぜか嬉しそうに笑った。

「でもベロニカが命を繋いでくれたおかげで、僕はやり直せた。今度こそ、誰も失わずに世界を救ってみせる」

「それでこそ、あたしが導くべき勇者さまよ。しっかりやんなさい。……それと、ありがとね。諦めないでくれて」

それは、ただの素直な感謝だった。彼が時を巻き戻す決断をしなければ、ベロニカは命を散らしたままだったのだから。ベロニカが犠牲になったという命の大樹での一戦は過去と異なり大きな被害を出すことなくやり直され、現に今、こうして生きている。

ベロニカが何の気なしに口にした一言に、それまで穏やかだったイレブンの表情が強張った。

見る間に目は潤み、引き攣らせた口から嗚咽が漏れる。

とうとう顔を真っ赤にして涙をこぼした勇者に、ベロニカは目を丸くした。

「ちょっと！　どうしたのよ」

「……ううん、ごめん……本当は、ずっと、一人で、間違っていないか不安だったんだ……でも今、絶対に正解だったって思えた。ありがとう、ベロニカ」

聞けば、彼は夜ごと追憶の根に通っては大樹に刻まれた失われた過去を見返していたのだという。何も知らない今の仲間たちには失敗した過去のことを告げることができず、一人きりで巻き戻しの選択の重さを背負っていたのだ。かつて共に戦い地獄のような世界を駆けてきた過去の仲間たちの幻影を見ることだけが、イレブンを奮い立たせていた。昨夜ベロニカに見つかったのは、不運と言うべきか、幸運だったというべきか。

鼻をすすり泣き笑いを浮かべる年若い勇者の手を握り、ベロニカは小さな手でその頭を撫でた。この人を守り支え、必ずや平和を取

り戻さなければと心に誓う。もはや使命は義務ではなく、れっきとしたベロニカの意志だった。

「お姉さま、今日は特に澆漑としていらっしゃいますわね。呪文も冴えてますわ」

何も知らないセーニャが、長い髪を揺らして能天気な笑顔を向けてくる。

寝不足からくる不調を隠せているのなら問題はない。それに、彼女に要らぬ心配をかけたくないというイレブンの気持ちも、なんとなくわかった。

他の仲間たちに時渡りのことを告白しないのか、と尋ねると、イレブンはその時を見極めたいと言った。もともと誰にも口外しないまま墓まで持っていくつもりだったが、思いがけず最も知られるべきでないと思っていたベロニカにばれてしまったことで心境が変わったようだ。

イレブンから打ち明け話を聞いても、その失われた時間の記憶が蘇ってきたわけではない。もっとも、ベロニカは巻き戻された時間のほとんどを生きていないのだから記憶がなくても当然なのだが、少なくとも自分が絶命する前後のことを思い出したりすることはなかった。

しかし、セーニャはどうだろうか。ベロニカを失い、本来二人で分け合うはずの使命を一人でやり遂げたという彼女は、その尊くも辛い記憶を思い出してしまったりしないのだろうか。あるいは、記憶として取り戻すことはなくとも、ただベロニカが過去に自分を庇って死んだという事実だけで心を痛めるかもしれない。

他の仲間たちにしても、同じことだ。知らなくてもよかった酷い過去の世界のことをわざわざ伝える必要はないと思うのは、イレブンでなくてもそうだろう。

でも、とベロニカは隊列を組む仲間たちを見回す。

ここにいる誰もが、イレブンのことを案じ、大切に思っている。ベロニカが彼を勇者として認め敬い、まるで弟のように庇護し守りたいと思っているのと同じだ。イレブンが一人きりで重すぎる世界の秘密を背負うなど、誰一人よしとしないだろう。知れば、もっと早くに打ち明けなかったことを詰るに違いない。

あの時と似ている。ベロニカは前に行く青い後ろ頭を盗み見た。水くさいんだから。もっとあたしらを頼れっての。

ベロニカが鼻息荒く憤るのを、救われた直後のカミュは苦笑しながら見ていた。クレイモランで、黄金の塊と化していた彼の妹の呪いが解かれた時のことだ。

それまで自分の事情などおくびにも出さず、ただ眉唾物の預言に従い、献身的にイレブンを助けてきたカミュ。彼がどんな思いで旅に付き合い、そして長い時間の果てにイレブンにその秘密を打ち明け助けを求めたのか、ベロニカにはわからない。

生まれがわからないのは同じでも、彼女は大切に守られ育てられ、愛されてきた。あまりにも不運でやさしくない道を歩かされてきた彼の苦悩を、簡単に理解できるなどとは思わない。思っただけじゃない、とわかっている。それでも、傍に立つ仲間として、頼ってほしかったと言わずにはいられなかったのだ。

しかしそんなことを思い返している間にも、脳裏によぎるのはあの時のカミュの笑顔だった。

初めて身の上話を聞き、黄金の立像が人の姿に戻るのを見届けたベロニカが、涙を滲ませながら水くさいと憤っていたのに、カミュは笑っていた。文字通り、呪いが解けたのはマヤだけでなくカミュもだったのだ。あの晴れやかな笑顔と、ありがとな、とベロニカの頭にそっと置かれた手は、今も目に焼き付いている。

「重症ね」

誰にも聞こえないような声量で、ベロニカはひとり自嘲した。

時を渡ってきたというイレブンの話は衝撃的なものばかりだった。かつて魔王に敗れ、一度は命の大樹が墜ち、多くの命が失われたこと。その犠牲者の中に、なんとこの自分も含まれていたこと。

それに、時を渡る前はいなかったという邪神の存在。巻き戻された仲間たちの記憶。

考えなければいけないことはたくさんある。

それなのに、昨夜聞いたカミュの独白が耳から離れない。

オレはアイツに惚れてたみたいだ。

頭の中で何度もリフレインする、カミュの声。

周りに仲間がいるというのに頬は熱くなり、動悸がする。ベロニ

力は緩みそうになる口元を慌てて手で覆い隠した。隣でセーニャが首をかしげるのを、なんでもないわよ、と首を振ってあしらう。

ばっかじゃないの、あたし。浮かれちゃって。

近頃思い悩んでいたのが嘘のように、心が軽い。自覚も自制したいという思いもあるのにうきうきと弾んで、この魔窟ですらワントーン明るく見えるようだ。

意中の相手が、自分に好意を持っている。それだけでこんなにも浮き足立つ己に、ベロニカは小さくため息をついた。それですら、にやにやと上がってしまいそうな口角を誤魔化せそうにない。

すこぶる好調なベロニカと対称的に、セーニャがおずおずと手を挙げたのは、それから両手の指では足りないくらいの魔物の集団を退けた頃だった。

「申し訳ありません、あとベホマ数回ほどで魔力が尽きそうです」

弱音を吐いているわけではない。回復役の要であるセーニャは、自らの魔力の残量を正確に把握しパーティに共有する必要がある。彼女が無理をしたり残りの魔力量を偽れば、それは全滅に繋がる可能性があるからだ。

ダンジョン内では太陽の位置がわからないため時間の経過が分かりにくい、言われてみれば確かにかなりの時間が経っていたようだった。ベロニカと共にパーティ随一の魔力量を誇るセーニャではあるが、こうも連戦では回復を担う彼女の負担は大きくなる。

「あら！　ちょうどアタシも疲れてきたと思っていたところだったのよ！」

「限界の極限まで走らんで済むのは老体には助かるわい」

「そうだね、今日はそろそろ一旦引き上げようか」

シルビアとロウが続けると、イレブンが頷く。

撤退に異論を唱える者はいない。朝から黙々と武具の素材探しと魔物相手の鍛錬を繰り返し、いかに鍛えていると言えど皆疲弊しているのだ。そうでなくとも、連日戦い詰めの身体は早めに休めるべきである。皆が武器や盾を降ろして荷をまとめ、イレブンの脱出呪文に備えているときだった。

「ん、どうした？」

カミュが問いかけたのは、きょろきょろとあたりを見回すイレブ

ンである。一瞬迷ったような顔をしたが、相棒の目は誤魔化せないと悟ったのだろう。

「実は、ときのすいしょうがもう一つあれば今夜作っちゃえる防具のレシピがあってさ。さっきこの辺で一つひろっただろ？ あわよくば、なんて思ったけど、さすがにそんなにうまくは落ちてないもんだね」

今日はしっかり休んで、明日改めて探すことにするよ、と笑ったイレブンの肩をカミュが軽く叩く。

「お前はさあ、もう少し人に頼ることを覚えろよな。ときのすいしょうなら、よく隠し持ってる魔物がいるんだよ。一ついただいたらすぐリレミトすっから、お前らは先に宿に戻ってな」

「僕は普段からだいぶ頼らせてもらってると思うけどな……ありがたいけど、カミュだって疲れてるだろ。一人で残すのはさすがに……」

「そういうことなら、あたしも残るわ！」

意気揚々とあげた高い声に、二人の青い目が同時にベロニカの方を振り向いた。話に割り込んだのは勢いに近かったが、腰に手をあて胸をそびやかす。

「リレミトができたって、宿まで飛ぶルーラが要るでしょう？ あたしはまだ魔力も残ってるし、しゅくふくの杖だってあるから安心よ」

思い切り眉間に皺を寄せたカミュが口を開く。おチビちゃんでもお節介焼きでも、なんとでも言えばいい、とベロニカは挑戦的にその目を見上げた。口では何を言おうと、裏側の本心を知っていると思えばかわいくすら思える。

しかしカミュの声を遮るように手を打ち合わせて明るい声を上げたのは、イレブンだった。

「わあ、助かるよ！ お疲れのところ悪いけど、ベロニカもいるなら安心だ」

はい、これ賢者の石と超ばんのうぐすりに、一応やくそうね。無理しなくていいから気をつけて。じゃあ！

目を丸くしたカミュが何か口を挟む隙を与えずに、イレブンはさっさと皆を集めると脱出呪文を唱えてしまった。あっという間に

仲間たちの姿は消え、障気の濃い古城のようなダンジョンにはカミュとベロニカの二人だけが残された。

深いため息と共に、カミュが片手で額を押さえる。その隙間から睨み付けるような眼光に射ぬかれ、ベロニカはたじろいだ。癖で、思わず喧嘩を売るような語勢になってしまう。

「な、何？ さっさと目的の魔物を探すわよ」

「チッ。イレブンにゃ悪いが素材集めは明日だ。リレミトするぞ」

「はあ？ な、なんで！」

詠唱を始めようとしていたカミュが、再度舌打ちする。カミュの言動にやや粗野なところがあるのは承知していたが、こうもあからさまに自分に向けて苛立ちをぶつけられたことはほぼなく、先程までとまた違う理由で鼓動が速まる。ベロニカの様子など意にも介さず、カミュは渋面を前に向けたまま問いに短く答えた。

「足手まといがいちゃやりにくくて仕方ねえ」

「なっ！ 言うに事欠いて足手まとい!? あたしの呪文を信用してないわけ!？」

目を三角にするベロニカを一瞥したカミュの目は、冷やかだった。

「お前の魔法は火力はあるが、やたら目立つだろ。オレは魔物に気付かれずに盗ってさっさと逃げるつもりだったんだ。足が短いヤツがいるんじゃ成り立たねえんだよ」

かっと頭に血が上る。気付けば、考えるよりも先に手が胸元のペンダントを握っていた。

まばゆい光が目を焼き、身体が伸びて視点が高くなる。驚いて目を見開くカミュの顔が、子供姿の時よりずいぶん近くに見える。

預言者から与えられたペンダントに魔力を込め、元の年齢の姿を一時的に取り戻したベロニカは、目の前の相手を思い切り睨みつけた。

「これなら文句ないでしょ！ 足が短いだなんてもう言わせないわよ」

「そういうことじゃねえだろ！ なにやってんだ、お前……この状況でこんなことに魔力使うなんてバカじゃねえのか！ 早くガキに戻れよ」

「戻り方なんて知らないわよ！　いつも勝手に戻るもの！」

「マジかよ……」

苦虫を噛み潰したような顔をしたカミュは、本気で呆れ、ベロニカの行動に辟易しているのだろう。つい負けん気を出して後先考えずに動いてしまったが、明らかに今までの口喧嘩と違う気はしていた。ひやりとした後悔が背中に迫るが、簡単に引き返すことなどできはしない。

いよいよリレミトの詠唱を始めたカミュの鼻先に、指先を突き付ける。頭に血が上っている自覚は、あった。

「リレミトするならアンター人でやんなさいよ！　ときのすいしょうはあたし一人で探してイレブンに届けることにするから！」

ベロニカの前に薄い魔法の防護壁が現れる。予想通り、カミュはリレミトの詠唱を止めた。

カミュが一人でこのダンジョンから脱出してしまえば、ベロニカは入り口まで戻るか自力で最深部に至りネルセンの試練を突破するまでここから出る術を持たない。つまり、ベロニカ単身での脱出は限りなく不可能だということだ。さらに高位の魔法使いであるベロニカがカミュのリレミトを弾き返すのは容易く、そうなればカミュはベロニカを一人このダンジョンに取り残すことになってしまう。彼がその判断をしないことをわかっていて、駄々をこねる子供のよう言い放ったのだ。

「……めんどくせえ女だな。さっさと終わらせるから、お前はなんにもすんなよ」

背を向けて歩き出すカミュの声は、底冷えしている。何か言い返してやりたかったけれど、あれだけ余計なことをまくしたてた口からは喉が詰まったようにもう何も出てこなかった。無言のまま、カミュの背を追う。

思い通りにはなったが、ベロニカはほんの数十分前までの高揚感が嘘のように落ち込んでいた。置いていかれないように、泥のように重い脚をなんとか動かし歩く。

天国から地獄とは、このことだ。

なんて馬鹿なことをしたんだろう。時が戻せるなら戻したい、などと考えて昨晚のイレブンの話を思い出し、自嘲する。

完全に浮かれていた。大樹の根が見せた幻に舞い上がって、カミュと二人きりになれるチャンスだなどと思うなんて、なんて愚かだったのか。結果、自分の浅はかさと彼の冷たい目にうちひしがれている。

そもそも、ベロニカに惚れていたと言ったカミュは、イレブンが時を巻き戻す前のカミュだったのだ。その上、彼は「ベロニカがいなくなって初めて気がついた」と言っていた。つまり、命の大樹でイレブンがウルノーガに敗れることなく、ベロニカを失わなかったこの世界では、カミュがベロニカに惹かれていたことを自覚するきっかけ自体が存在しなかったのではないだろうか。

こちらを振り返る素振りなど一切なしに前に行くカミュは、ベロニカのことなどなんとも思っていないかもしれない。それどころか、イレブンのための素材集めに強引についてきて邪魔をし、あぐく危険なダンジョンの真ん中で無意味なわがままを言うベロニカにうんざりしているかもしれない。

イレブンは、時を渡って未来を変えたと言っていた。選択によって、あり得たはずの事象は確実に変わる。落としたはずの命を拾い、出会わなかったはずの人と再会しうる。変化するのは、人の心も同じに違いない。

気がついてしまうと、あまりの失態に血の気が引いた。

ベロニカの行動によって、自覚せずとも好意を持っていたはずのカミュの心が離れる可能性も大いにありうるのだ。

今すぐ謝って、リレミトを唱えてほしいと頼むべきだろう。カミュの言うことはすべて正論だった。彼一人なら持ち前の素早さと身のこなしで魔物の隠し持つ物だけをのだけを盗み、怒らせる前に逃げられる可能性は高い。しかしそれは単身での行動の場合である。大人の姿になろうが、ベロニカはいるだけでカミュの足を引っ張ってしまう。

鼻の奥がツンとする。

自業自得だとわかっていても、あり得たはずの未来を取りこぼすと思うとどうしようもなく悲しい。乾いたくちびるは、この期に及んでまだ声を出すことをためらっている。ツンツンと逆立った後ろ頭に手を伸ばしかけ、なんとか謝ろうと口を開いたところだった。

「いたぞ、アイツだ」

ベロニカが声を発する前に、急に振り向いたカミュは物陰で身を屈め、手招きする。ベロニカは慌てて同じように頭を低くしてカミュの隣にしゃがんだ。

金属の擦れる不快な音をたてながらどういう理屈かふわふわと宙に浮かんでいるのは、毒々しい赤色でボディを塗られた二本角の機械兵だ。片手には大振りの剣、もう片方には悪趣味な棘付きの鉄球を構えている。その周りを形状の違う鈍色の機械兵たちがぞろぞろと歩きまわっており、どうやら赤い角付きはそれらの親玉なのだろう。

ベロニカはカミュの様子を伺いながらも、思わず苦い顔をした。あの殺人マシンたちが雑魚とは言いにくい厄介さなのを知っているからだ。

「あの赤いやツが、おそらくときのすいしょうを持ってる。一匹でウロウロしてくれりゃ楽だったんだが仕方ねえ」

魔物から目を離さずに小声でつぶやいていたカミュが、一瞬だけベロニカを見た。

「……でも、お前がいるからな。オレが特攻かけて盗ったら合図するから、何か一掃できるようなの、ぶちかませるか？」

ぶわりと、体中の血が湧くような気がした。杖を握る手に力がこもる。

怒らせた、失望させたと思っていたけれど、まだベロニカを信頼して背を預けてくれる。

少し気まずげな青い瞳と口元に彼の人の良さをみたような気になって、ベロニカは頬が緩むのを隠せない。たとえ恋愛対象としてなんとも思われていなかったとしても、ベロニカの呪文の威力を買って、信じてくれている。それだけで頬が上気するのを感じる。どうしようもなく、うれしい。

「まかせて！ あたしを誰だと思ってるの？ 大魔法使いベロニカ様よ！」

僅かな苦笑を残して、カミュは音もなく駆け出した。

勇者の相棒の異名は伊達ではない。盗賊の端くれをやっていた頃はあまり冴えなかった、と本人は言うが、素人目にも気配を消して

忍び寄るスキルは相当のものではないかとベロニカは思う。一般の人間はもちろん、戦いに慣れた魔物にすら気付かれずに背後を取れるのは、彼の研ぎ澄まされたスキルのなせる業だろう。

カミュはあっという間に機械兵の集団に近付いた。しかし標的である赤い角付きの周囲には、旧式の雑兵たちが何体もうろついている。雑兵といっても一台一台が重い一撃を繰り出す厄介な魔物だ。

固唾を飲んで見守っていたベロニカは、彼の挙動から目を離さぬように魔力を練り始めた。合図に間に合わず、カミュを危険に晒すなんてへまは絶対にできない。

ベロニカは、己の魔法に絶対的な自信があるわけではない。何事にも絶対はなく、そこにあるのは日々の地道な努力と研鑽の結果だけである。結果は努力が作るが、その努力は必ずしも成功を連れてくることができるとは限らない。そのことを彼女は知っている。

だから、常に最善を尽くす。驕ることなどできる筈がない。自分を信じて、己を構築してきた魔法の理論と基礎動作を、一つ一つ土台から編み上げる。

複雑な術式と練り上げた魔力が、未だタイミングを見計らっているベロニカの意志とは別に反応を起こそうとする。肌で感じる呪文暴走の予感に、にやりと笑った。あれだけの集団を殲滅するなら、暴走も好都合だ。

いつでも撃てる。先走って指先から漏れ出る魔力の片鱗を抑えながら、ベロニカは合図を待つ。

そして、機を伺っていたカミュが動いた。

見失ったのは一瞬だった。カミュはその健脚で、助走をつけると宙高く跳び上がったのである。彼が軽い金属音と共に標的の頭部に降り立つまで、機械兵たちは一台としてその状況に気付く者はいなかった。

回転式の頭部がぐるりと動き、目玉代わりのランプが一斉にカミュへ向く。しかし既に、カミュは赤いボディーの隙間からときのすいしょうを掠め取っていた。

突如角を掴まれ頭部を踏みつけにされた機械兵 - - キラークリームゾンは、しかし機械らしく激昂することもなく、手に持つサーベルと尾の弓矢を標的に向ける。まったくの躊躇も猶予もないのが、心

を持たない魔物らしい。

「ベロニカ！ 今だ！」

バネのような筋肉をしならせ、カミュが再び飛び退く。空振った機械兵の武器が鋼鉄のボディーに刺さるよりも早く、ベロニカの杖が天を衝いた。

「イオグランデ！」

轟音と共に爆風が巻き起こる。

詠唱、術式、タイミング、すべてが完璧だった。ベロニカの唱えた極大爆発呪文は通常以上の威力で炸裂し、爆発の瞬間の閃光に備えてベロニカは目を細めた、はずだった。

「ベロニカ！」

突然の強い衝撃。そして、痛み。

背中と頭を強打したのだとわかるまで、数秒かかった。全身がズキズキと痛み、手に力が入らない。とてもじゃないが、立ち上がれない。

混乱する頭はなにが起こったのかわからず、ベロニカはただその場に這いつくばっていた。

前方で、自分の放ったイオグランデの爆煙が少しずつ晴れてくる。

バラバラのスクラップと化した機械兵たちの部品が散らばる中、キラークリムゾンの赤い装甲が相変わらずふわふわと浮かんでいるのが見えた。やけに艶のある赤色の金属が淡く光を放っている。

そういうことか、とベロニカはようやく動いた右手で頭を押さえた。

なぜ気付かなかったのだろう。勇者謹製の防具が魔法の守りを備えているのと同じように、あの魔物の装甲にもまた、特殊な魔法効果があるのだろう。皮肉にも、先ほどベロニカがカミュに使ってみせた呪文反射の魔法に違いない。キラークリムゾンだけはイオグランデを術者であるベロニカに跳ね返したというわけだ。

先日新調したばかりの法衣のおかげで爆炎に焼かれることはなかったが、ベロニカのとおきの呪文だけあって、弾き返された衝撃を浴びた全身が軋む。

こんなところで倒れている暇はないのに。

早く起き上がって残りの魔物にとどめを刺さなければ、信じて任せてくれたカミュに、合わせる顔がない。

機械でできた単眼が、こちらを捉えた。金属の擦れる嫌な音を立て、尾の弓がキリキリと引かれる。

ベロニカは機械兵を思い切り睨みつけた。心だけは折れていないが、他にできることがない。

きっと数秒経たず襲い来るであろう激痛に身を固くした次の瞬間、目の前に影が落ちた。

刃が閃き、弓を構えた鋼鉄の尾がぼとりと落ちる。

ならば、とサーベルを振り上げた左腕が半ばからすばりと斬れて落下し、右腕も滑り落ち、そして赤い角付きの頭がごとりと落ちた。指揮系統を失ったのか、宙に残された胴が最後に崩れ落ちるとバラバラになったキラークリムゾンは完全に動かなくなる。

目だけで上を見ると、長剣を鞘に戻したカミュがこちらを向くところだった。逆光で見えづらいその表情があまりに険しく、ベロニカは思わず目を閉ざした。

いったい、どんな顔をすればいいのだろう。

さんざん足を引っ張って、わけのわからないわがままを言って、預けてくれた背中も守れない。

期待に、応えられなかった。あまりの不甲斐なさに、今度こそ涙が溢れてしまいそうで、ベロニカはくちびるを噛み締める。

徐々に手足の感覚が戻ってくる。全身の痛みも薄れてきたが、あまりの情けなさに身を起こす気にならない。

「大丈夫か？　おい、ベロニカ？」

降ってくる声が思いのほかやさしい。冷たく詰られるよりも余計に返事がしづらくて、ベロニカは咄嗟に声を出すことができない。

目を開けず黙ったままのベロニカに、カミュはダメージが重かったのだと解釈したらしい。屈むと上半身を抱き上げ、軽く頬を叩く。

「おい、ベロニカ。マジかよ。おい！」

焦った声に、不謹慎ながら胸が疼いた。

初めて大人姿でその腕に抱えられたせいもあるかもしれない。不埒なときめきに後悔したばかりだというのに、意外に厚い胸板と逞

しい腕に否応なしに緊張してしまう。

心配をしてくれている。あたしの怪我を。

これ以上なく愚かな歓喜だ。

仲間、しかもダンジョンに二人きりで、多少頼りないが回復役である相手の心配をしない人間などいるだろうか。少なくとも、カミュは気のいい男で、たとえ見ず知らずの相手だろうと怪我をしていれば手を差し伸べる奴だ。今倒れているのがベロニカでなくとも、同じように慌て、心を痛めてくれるだろう。

でも。たとえそうであっても、彼がベロニカのために動揺してくれていることが、たまらなくうれしかった。

ふと、昨夜のことが頭をよぎる。

もし、あたしがこのまま目を覚まさなかったら、カミュはあたしを失いたくないって思ってくれるかしら。

巻き戻された過去と同じように、ベロニカを喪う可能性に触れたら、惹かれていたという眠っていた気持ちに気がついてくれるだろうか。

急に心臓が早鐘を打ち始める。

目蓋が震えそうになる。

このまま、少しの間だけなら。

好奇心というよりは、邪な期待が強かった。くたりと力を抜いたままの身体を預け、繰り返し呼びかけてくれる声に酔う。

ほんの十秒ほどが、やたらと長く感じた。

ぱちん、と何かが爆ぜたような感覚に、ベロニカは息を止めた。目を閉じていてもわかる。ペンダントの効力が切れ、身体が子供の姿に縮んだのだ。魔力はまだ尽きたわけではないが、時間切れだったのかもしれない。

同時に、はっと気がつく。

なんてことをしてしまったのだろう。

姿かたちこそ似ているわけではないが、彼の目に映るベロニカは幼い少女であることは違いない。幼い妹を失いかけたトラウマのある彼に、なんてもんを見せようとしたのだ、自分は。

ベロニカは、ぱちりと勢いよく大きな目を開けた。

「ベロニカ！」

驚いたような安堵の声は明るく、彼の顔が青白く憔悴していないことを確かめて、ベロニカは宙を指差した。その先に林檎ほどの大きさの炎が浮かぶ。

カミュの心の傷を抉ってまで、好きになってもらわなくていい。

あたしには、巻き戻されたベロニカが歩けなかった未来がある。死ななくたって、ずっと先だとしても、いつか気付かせればいい。きっと、きっといつか振り向かせてみせる。

みるみるうちに火球は膨れ上がり、ベロニカの身長をゆうに越して燃え盛る。抱えられたまま、炎の塊をカミュの背後に迫っていた機械兵へと叩きつけた。

「メラガイアー！」

取り逃していた機械兵は、高温の炎に飲み込まれ、すぐに形を失い、焼き尽くされた。

カミュは呆然と機械兵だった残骸を振り返る。魔物に近づかれていることに気付いていなかったらしい。

ベロニカはふらつきつつもカミュの腕から降りると、ニヤリと笑って片目をつむった。

「ご要望通り、一掃、できたわよ？」

目を瞬いたカミュは、毒気を抜かれたように吹き出した。小さくなったベロニカのおさげ頭を、少し乱暴に掻き回す。

「心配させやがって！　つーか、メインはオレがやったろ！」

「ほとんどはあたしよ！」

ひさびさに向けられた笑顔がうれしい。髪がぐちゃぐちゃになっちゃう！　と口調は怒りながら、ベロニカもまた笑顔になるのを止められなかった。

◆◆◆◆◆

「カミュ、ごめん。懺悔させて」

背後からかけられた声に、カミュは振り返った。

無事手に入れたときのすいしょうを検分し、間違いないことを確認して脱出呪文を唱えたところである。空が見える場所へ出ると、すっかり傾いた陽が夕方であることを示していた。

いつも通りの小さな子供姿に戻ったベロニカが、神妙な顔でカミュの腰帯の端を引っ張っている。

「ん？」

朝から仲間たちと共にダンジョン攻略に勤しんでいたのに加え、先ほどの一戦でだいぶ怪我をさせてしまった。彼女自身のしゅくふくの杖やありったけのやくそうの類を使って応急処置をしたが、あちこちにできた擦り傷や痣はすぐに消えるわけではなく、痛々しい。本人は平気だと繰り返し、宿に戻ったらすぐに妹による治療をきちんと受けると言っているのだから、もう他に何もできることはないのだが、カミュは自身の判断ミスを後悔せずにはいられなかった。

標的の装甲に呪文反射の魔法がかかっているなんて、思いもしなかった。ときのすいしょうを隠し持っていることがわかるくらい戦ったことがあるのに、今まで反射されたことがなかったことを鑑みると、発動するのは毎回ではなく、稀に起こるくらいなのかもしれない。少し考えれば、そういう特性をもった魔物がいることくらいわかりそうなものなのに、みすみすベロニカを危険に晒してしまった。

ベロニカのことだ、きっと自分のせいだと言っても認めないだろう。逆に思い上がるなと怒られるかもしれない。彼女はそういう人間だ。

人に守られるなんてよしとしない、自らの手で道を切り開き他人を守る彼女は強く気高い。それでも、隣に立ちたい、かかる火の粉を払いたいという想いを認めたばかりだというのに。

金のおさげ髪についた汚れを払って、ベロニカはどこか硬い表情でカミュを見上げている。きっと冗談や軽口の類ではないのだろう、カミュは意識して深呼吸すると、片膝をついて目線を合わせた。

「さっき - - イオグランデを跳ね返されて吹っ飛んだとき、本当はずっと意識があったのよ」

「うん？」

予想外の内容に、カミュは目を瞬かせた。確かに、衝撃で壁に叩きつけられた彼女は昏倒しているように見えたが、それはそんなに

長時間のことではなかった。軽い脳震盪でも起こしていたのかと思っていたが、意識があったのなら少々慌てた自分の様子を見られていたのだろうか。少しばかり気恥ずかしいが、それは今更だ。

「もし、あたしが危ない目に遭ったらアンタがどんな顔をするか、見てみたいって思って。……ううん、違う。えーと……あたしのことを失いたくないって思ってくれるかなって、わざと起き上がらなかったの。試すようなこととしてサイテーよね、ごめん」

「……なんだ、そりゃ」

いったい、どういう意味だろうか。

丸い紫色の目は、きまり悪そうに自分のつま先辺りを見ている。まるで恥じらっているようなその挙動に、カミュは抱いた困惑と動揺を飲み込んだ。

これだけの期間共に旅をしてきて、仲間の危機に顔色一つ変えないような冷血漢だと思われていたのだろうか。いや、今更そんなことを言いたいわけではないことくらい、カミュにもわかる。

思い当たる可能性に、カミュはがりがりと頭を掻いた。

近頃、ベロニカに対して自然に振る舞えていない自覚は多大にあった。人を騙し騙され生きてきた過去の経験から、顔に出さないことには多少の自信があったはずなのに、あの時から彼女の前ではさっぱり上手くいかなくなってしまった。どうしても今まで通りの顔ができず、避けたりつつけんどんになってしまっていたのは否めない。今日も急に二人きりにされて、必要以上に態度と口調に荒さが出てしまった。

カミュが急に距離をとるようなことをしたから、彼女は嫌われたと勘違いしてこんなことを言うのだろうか。そうでなければ、と別の可能性を思い浮かべたカミュは思わず首を振った。ベロニカの懺悔とやらはひどく思わせ振りだが、あまりにも都合が良すぎる。

カミュが二の句を継げられずにいるうちに、ベロニカは俯きかけていた顔を上げ、反対に不敵に笑って見せた。

「でも、考えてみたらこんなのあたしらしくないわ。安心してよね、あたしはちゃんと、強くて元気なまま魅了してやるんだから」

茜色の夕日を浴びた、勝ち気な微笑みは彼女らしい。そのきらきらと輝く瞳の色に、力強い眼差しと自信に満ちた表情に、カミュの

心を捉えて放さない面影を見た。

「あーあ……だっせえな、オレ」

どうして彼女はこんなにもまばゆく素直で強いのだろう。一応年上の男のくせに、まるで思春期にもならない子供のように、好きな相手ととともに話せないなんて格好悪すぎる。

「死んだふりも魅了も、今さらする必要はねえさ」

ベロニカにここまで言われてしまったのだ。

カミュは覚悟を決め、もう一度深呼吸をすると再度ベロニカに向き合った。己が逃げ出さぬよう、両手を彼女の肩に置く。

腹をくくって、告白せねばならない。彼女の大人姿を見たその時に、かねてより惹かれていたことをはっきりと自覚してしまったことも、そのせいで子供姿の顔ですら目を合わせられなくなっていたことも。

「なあベロニカ、オレの懺悔も聞いてくれるか？」